

老人を随筆

森田たけし著

講談社版

をんな隨筆

著 者 森田 たま

昭和三十七年四月二十日 印刷

昭和三十七年四月二十五日 發行

發行者東京都文京區音羽町三ノ十九野間省一

印刷所東京都文京區大塚坂下町一一四豐國印刷株式會社

製本所東京都新宿區築地町九大製株式會社

發行所東京都文京區音羽町三ノ十九講談社

電話東京(941)代表三一〇一(九)番 振替東京三九三〇

定價三百八十圓

亂丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替へいたします。

© Tama Morita 1962

目 次

老年の思ひ ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 五	を ん な ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 七	う ら 若 草 ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 五	見 る だ け ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 四	こ ぎ ん ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 四	絹の美しさ ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 六	着物のいのち ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 五	アイロンのかかつた肌着 ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 三	着物への執念 ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 三	雪のふる町 ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 三	さてもさてもそなたは ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 一六	紋 付 ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： 二
--	--	--	--	---	---	--	---	--	---	--	---

あかない酒場の話	パンと経済	女の飲みもの	ピクルズ	人生の設計	筍	牙え返る	自畫像	装幀	青葉かげ	手鹽にかける	ひまの忙しさ
二六	一五	二〇	七	六	六	七	八	九	七	九	六

好きなお菓子	………	一〇
旅に拾ふ	………	二八
デンマークの「切りたんぼ」	………	二三
ストック	………	二四
カッパン健在	………	二七
アンネのかくれ家	………	三〇
風と太陽	………	三四
白樺と柏の林	………	三六
山のかなた	………	四〇
梅雨の花	………	四六
浴衣の雰圍氣	………	四八
春の装ひ	………	五一

[illegible]

夫のすべて……………	一八六
茅葺屋根の家……………	一九一
お茶を樂しむ……………	一九五
木ばさみの音……………	一九七
捨てたマッチ……………	二〇二
町と自動車……………	二〇五
若い杉の樹……………	二〇八
あけびの籠……………	二一〇
紙　　と　　私……………	二二二
アルプスの花の時計……………	二二三
一人で買ったカード……………	二三八
子供の心理……………	三三

石と木の家	………	三四
田舎源氏の庭	………	三六
見わたせば青やなぎ	………	三九
「變奏曲」について	………	三一
清方先生の「こしかたの記」	………	三二
四十年の夢	………	三四
冬來たりなば	………	三七
横濱	………	四〇
東京の蟲の音	………	四四
寢臺車の中で	………	四七
旅の心得	………	五〇

著者 自 裝

寫眞 西本宣惠

をんな
隨筆

紋 付

人生五十年を生きぬくために、むかしの人はいろいろな關門を設けたやうである。

まづ厄年があつた。

女は數へどし十九、三十三の二回、男も二十五、四十二と二回あつて、それをぶじに通りとすと、今度は六十一の還暦の祝ひになる。

それから七十、七十七、八十、八十八と祝ひがつづいてゐるが、八十八が米壽の祝ひで、最上のものでされてゐるのは、それまで生きる人の數がすくなかつたせゐであらう。近ごろのやうに平均年齢が七十何歳かまでのびてくると、祝賀年齢も變更しなくてはならないかもしれない。

五十年の生活にさまざまな區切りをつけたやうに、年毎の區切りも大切にしたい。

毎日を怠りなく働いて一年をおくり、新しい年のはじめには皆々紋付を着て屠蘇を祝ふ。青疊の香の匂ふやうな座敷に、家長を上座に、家族一同が紋付を着てならび、年の幼ない者から順々に、屠蘇を祝つてゆく情景は、いかにもあらたまつてゐて、しかも和やかで、新しい年のはじめ

らしくてよかつた。女學校にはいつた年のお正月に、紫の紋綸子の、二枚がさねの紋付ができた時のことは、いまだになつかしい思ひ出として残つてゐる。

十一月三日は文化の日といふことで、功勞者に文化勳章の授與式があつた。

いままで、大衆作家といふ名目で、この勳章の選に洩れてゐた感じのある吉川英治さんが、今回めでたく受賞されたのは、私たちの大きなよろこびであつたが、それについて、吉川さんが毎日新聞に執筆された「紋付を着ざるの記」に、私は心を打たれた。

若き日、父上の事業の手ちがひから倒産し、その上長い病氣に就かれたために、一家の生活は自然に長男である吉川さんの肩にかかつてきた。

いままでの何不足ない富裕な暮らしから、一轉して、その日の糧にも困るやうな境遇にはいつた吉川さんは、それまで通學してゐたブルジョア學校を退學して、ある商店へつとめることになつた。

それ以來、吉川さんはいろいろな職業に従事して、身を粉にして働き、一家の生活を支へてきた。小説を投稿して、その賞金で一家をうるほしたこともあつた。

そんな風にして青年の日を迎へた年の正月、御兩親がひそかにこしらへておいた紋付の一ト揃ひを出して、吉川さんに着せようとした。

吉川さんはそれをことわつた。まだまだ紋付などを着て、くつろぐ時代ではないといふのである。

父上と押問答の末、吉川さんはつひに、一生紋付は着ないといひ切つた。

子供一人が働いてゐる一家への援助をこゝわつた、名譽ある、金持の親類たちの非情さが、若い心に深くしみて、さういふ階級のよろこぶ紋付など、一生着るものかといふ青年らしい反抗の思ひがあふれてゐたのであらう。吉川さんは物質といふものの貴重さを身に噛みしめて、その善惡の両面を知り、たとへ天地が裂けようとも、自分はつねに庶民の味方であらうと覺悟されたにちがひない。

お茶のおよばれなどで、吉川さんにお會ひする時、一度も紋付を着ていらつしやらないことに、私はいつか氣がついた。

戦前からのおつきあひで、やつとこのごろ氣がついて、お茶の作法を無視する吉川さんではないのに、どういふわけか、何か理由があるのか、伺つてみたいと思つてゐた矢先きであつた。

長年の疑問がとけて、私は胸のうちがすうつとした。さうして、一言の辯解もなく、長年のあひだそれを通していらした吉川さんに、あらためて敬意を表した。

おなじやうな過去が、私にもある。

若い日、一生紋付を着まい、新しい年のはじめにも紋付は着まいと心にきめたことが、私にもあつた。

さうして三十數年來、まがりなりにも今日まで、どうやら自分流にやつてきたけれど、年をとつて、社會といふものへのつながりが多くなると、それを通すにはいろいろな抵抗のあること

を、身にしみて味はつてきてゐるので、私などよりはるかに早く、社會との接觸の多かつた吉川さんは、抵抗の度の強さもさこそと察しられて、よく耐へていらつしやいましたねと、握手の手をさしのべたい感動に驅られたのであつた。

むかし、私が決心した場合は、吉川さんのやうに生活につながる問題からではなかつたけれど、日本の因襲といふものに對する反逆といった氣持には、吉川さんと共通のものがあるのではないかと思はれる。

私たち夫婦は結婚にあたつて、ある複雑な事情から、區役所に届け出るだけで夫婦になつたのであつた。結婚式も、もちろん披露宴もなかつた。私は自分のうけついで財産を放棄し、夫もまた自分の分け前を放棄する證文を書いて、實兄から結婚届の判をついてもらつた。

八年たち、子供が二人生れてから、關東の大震災にあつて、故郷河内へかへることになつた。

ついては出入りの小作人たちに披露しなくては、家へはいつてもらへない。披露宴には丸鬘に結つて、黒の裾もやうを着てもらひたい。

夫の生家からのその申入れに對して、私はだまつて髪を切つた。

斷髮にルイズ鬘といふハイカラな鬘をのせ、いまだかつて着たこともない、チュールリップのもやうの紋のない訪問着といふものを着て、河内の田舎の一町四方もある家の披露宴に出席した。

一生紋付を着まいといふ決心を、その時にした。

去年、宮中新年御歌會始めに、陪聴しないかといふお誘ひを頂いて、私ははじめおことわりし